『海域アジア・オセアニア NEWSLETTER』3：38-43 (2025)

旧商館に響く音楽

――タイ・プーケットの音響空間

内住　哲生

一　はじめに

チェンマイから飛行機に乗りバンコク、さらにプーケットへ。ちょうど北部のチェンマイ県で長期調査中だった私は、共同調査に合流するため初めて南部のプーケットに足を踏み入れた。同じタイとはいえ、北部山地のやや乾燥した空気とは違う、海辺らしい湿度の高い熱気に包まれ、全くの別世界であることを肌で感じたのをよく覚えている（写真 1）。共同調査としては、観光地として栄えるプーケットにおいて事業を行う人々の「アントレプレナーシップ」のあり方を明らかにすることが目的であった［綾部　2024］。

写真 1　プーケットの夕暮れ（2024 年 3 月 6 日、筆者撮影）

一方、長らく音楽人類学に携わってきた私は、観光地プーケットにおいて音楽がどのように観光資源になっているのかに関心をもち、プーケット旧市街のライブバーに注目することにした。長期調査を行っていたチェンマイ県でも、市街地は観光地として賑わい、外国人観光客は夜になるとライブバーでナイトライフを楽しむ点は共通している。しかし、その音響空間、ライブバーをとりまく環境は異なっており、調査を進めるうちにそれがプーケット旧市街の成立過程にも深く関係することに気がついた。本稿では、そうした視座からプーケット旧市街のライブバーがどのような音響空間であり、どのような場であるかについて、知り得た情報からごく予備的な考察を行ってみたい。

二　ババ・プラナカンによるプーケット旧市街の形成

ここでまず、マレー半島に位置するプーケットの歴史について触れておく必要がある。19 世紀初頭から 1 世紀ほどの間、プーケットなどシャム南部の開発を行ったのは、イギリス領マレーのペナンに移住した華人とその子孫だった。1840 年代に錫の価格が高騰すると、ペナンを中心として福建系華人の流入が進み、さらにペナンを玄関口として周辺のシャム南部にも流入が進んだ結果、この地域は錫の採掘と貿易によって発展していった［Khoo 2012：300-301］。かれらマレー社会に現地化した華人系の人々はババ、もしくはプラナカンと呼ばれるようになった [1]。ババ・プラナカンは福建・マレーだけでなく西洋の文化も吸収し「中国・ポルトガル様式」とも呼ばれるプラナカン様式の商館やコロニアル様式の邸宅を建て、ペナンと同様の景観をプーケットに形成していった［須永　2020］。

こうして形成されたババ・プラナカン的なプーケット旧市街の景観は近年再び注目を集めている。2000 年代以降プーケットのババ・プラナカンを中心に「タイ・プラナカン協会」

[1] 厳密には「ババ」は中国系男性とマレー系女性の通婚による子孫、「プラナカン」は華人に限らず移民と現地人の通婚による子孫を指すが、マレー半島のプラナカンの多くが華人系で両者が重なることから、煩雑さを避けるために「ババ・プラナカン」と表記する、という須永［2020：164-165］の用法に準じる。

が設立され［片岡 2014：9］、さらにコミュニティ・ミュージアムの設立、ストリートアート・プロジェクト、祭礼イベントの創出といったコミュニティ主導の取り組みを経て、2015年にはUNESCOの創造都市ネットワーク（食文化）への加盟を果たすなど、ボトムアップの景観保全が興隆してきた。2000年代後半から、これに呼応するようにプーケット旧市街への観光客も増加傾向にある［須永 2019：73；2020：166］（写真2）。

写真2 プーケット旧市街の街並みと観光客（2024年3月3日、柿倉圭吾撮影）

三　旧商館を再利用したライブバー

私が調査チームメンバーの柿倉（東京都立大学大学院）と訪れたライブバーもまた、プラナカン様式の商館を改築して作られたものだった。内側こそライブバー用に作り替えられてはいるものの、外側には大きな手を加えておらず、それが旧商館であることが明らか

だったのも、先述した景観保全意識の表れと言えよう。そのため、1 軒ごとの間口は狭く、奥に長い空間となっている [2]。これはチェンマイやバンコクではあまり見られない音響空間の利用法である [3]。この商館特有の細長い空間をどう使うかは、ライブバーによって異なる。図 3 のように店の奥にステージやモニターが置かれる店もあれば（写真 3）、側面にステージが設けられ、より客全体がステージに近くなる配置にしている店もあった。

写真 3　プーケット旧市街のライブバー（2024 年 3 月 6 日、柿倉圭吾撮影）

加えて、これはプーケットに限らず、タイのライブバーは内外の空間を厳密に仕切らないことが多い。そもそも扉がない場合もあれば、扉があったとしても日本のライブバーのように二重扉になっている訳ではなく、遮音性が低いのである。そのため、ライブバーを

[2] 目測ではあるが間口は 10m にも満たず、奥行きは間口の 4 倍以上はあるだろう。
[3] バンコクやチェンマイの場合もプラナカン様式に似た間取りの商館はあるが、そこがライブバーに再利用されることは多くはない。対して、プーケットの場合はそれが大半であった。

探す際も地図を見る必要はなかった。店から漏れ出る音のする方向に向かえば着くのである。

演奏される音楽は、やはり観光客を相手にしているのでほとんどが英語の洋楽であった。これはチェンマイやバンコクのライブバーとも共通している点である。今回の短期調査では具体的な選曲の傾向までは把握しきれなかったが、そう大きな違いはないと思われる。

一方、演奏者には傾向の違いがみられた。チェンマイの場合、演奏者は地元住民や、近隣の北部や東北部出身の演奏者の比率が高いのに対し、プーケットでは地元出身の演奏者はほとんどおらず、寧ろ国外出身の演奏者が目立った。この人は現地の人だろうか…？と思い話しかけた歌手もタイ語が通じず、英語で簡単な聞き取りを行ったところフィリピンから出稼ぎに来ているのだと教えてくれた。マレー半島に位置し 19 世紀から交易で栄えたプーケットは、今もコスモポリスの役割を果たしているのだろう。

四　おわりに

今回の調査ではあくまで断片的なデータに留まっており、演奏者、観光客の出身についてはより詳細なデータが必要だろう。また、建物が密集しており遮音性も低い空間で夜間に演奏することは、近隣の住民にとって騒音にならないのか、というのも今後調査したい点である。とはいえ、プーケット旧市街のライブバーが、その歴史的背景によってタイの中でも特有の音響空間となっていることは示せただろう。

参照文献

綾部真雄　2024「北のクニから――失意と希望のプーケット」『海域アジア・オセアニア NEWSLETTER』2：54-64。

片岡樹　2014「「想像の海峡植民地――現代タイ国のババ文化にみる同化と差異化」『年報タイ研究』14：1-23。

須永和博　2019「創造都市としての「ポスト海峡植民地」――タイ国プーケット旧市街地域を事例として」『立教大学観光学部紀要』21：67-82。

――――　2020「「場所の力」を紡ぐ――タイ国プーケットにおけるセルフ・ジェントリフィケーション」『観光学評論』8(2)：161-174。

Khoo Salma Nasution 2012 “Exploring Shared History, Preserving Shared Heritage: Penang’s Links to a Siamese Past” *Journal of the Siam Society,* 100: 295-322.

（うちずみ・てつお　東京都立大学大学院）